

# 出生順位が競技パフォーマンスに及ぼす影響 The effect of birth order for sports performance

1K07A023-8

指導教員 主査 正木 宏明 先生

今永 亜由美

副査 山崎 勝男 先生

## 【諸言】

先日、「2010年に開催されたFIFAワールドカップにおいて、日本代表選手は23人中16人が末子である」という記事を見た。そこで、この記事に興味を持ち、他のアスリートも調べてみると、以前日本代表であった中田英寿、王貞治、長嶋茂雄、イチロー、高橋尚子、浅田真央、宮里藍など、各界のトップアスリートには末子が多かった。そこで私は、この事実は偶然ではなく、末子の性格特性が、アスリート向き性格特性と似通っているからではないかという仮説を立てた。

本研究は、きょうだいの性格特性が、アスリート向き性格、さらには、トップアスリートとどのような関係性があるかをみていくことを目的としている。そして、末子はアスリート向きであるという仮説が、正しいかどうか検証していきたい。

## 【第一章 きょうだいについて】

本章では「きょうだい」について、きょうだいの生物学的基盤や、関係の特徴、関係の意味、関係性の規定、出生順位と性格の関係という、さまざまな角度から検討した。

きょうだい関係は、日常的に、上下関係、仲間意識、対立意識を体験している。しかしながら、長子、中間子、末子によって、その経験内容は大きく変わってくる。先行研究を調べた結果、長子は、リーダーシップがあり、責任感が強いが、遠慮がちで完璧という特徴がみられた。また、中間子は主に無鉄砲という特徴であった。末子は、競争心が強く、反逆的で、無理にでも自分の考えを通そうとする、はきはきしてほがらかという特徴がみられ、「きょうだい」による性格特性は様々な研究により認められている。

## 【第二章 パーソナリティ】

本章では、主に性格理解の方法、及びそれぞれの研究結果をみた。性格理解の方法は、心理的な特性をみる検査、競技前の心理状態をみる検査、競技中の心理状態をみる調査があった。たとえば、Y-G性格検査を用いた滝山・和田(2007)の研究結果をみると、成績上位者は、安定積極型を示していた。

## 【第三章 アスリート向き性格特性】

本章では、アスリート向き性格がどのようなものであ

るかを研究した。その結果、アスリートの性格特性は、男子は劣等感が少なく、のんきで活動的であり、支配性が強く、社会的外向という性格特性をもつ者が多かった。また、性格特性群でみると、活動的であり、社会的優位性や支配欲が強く、外向的であるが、やや衝動的な面をもっていることがわかった。一方、女子は抑うつ性が少なく、神経質でなく、のんきで活動的で、支配性や攻撃性が強く、社会的接触を好む傾向を示した。性格特性群でみると、情緒的には比較的安定しており、活動的で社会的であるが、やや衝動的な面があるということである。

## 【結論】

本研究から、末子の性格特性は、おおむねアスリート向き性格であることがわかった。たとえば、末子の無理にでも自分の考えを通そうとする性格特性は、アスリート向きの性格特性である積極的、自己実現意欲につながると考えられる。また、末子のはきはきしてほがらかなところが、アスリート向きの性格特性である、活動的、外向的な性格に通じていると考えられる。それに比べて、長子はあまりアスリート向きの性格ではないといえることができる。たとえば、遠慮がちな性格は、アスリートにとって大切な積極性と真反対の特性であり、何をするにも遠慮しては、試合で好成績は望めないように思う。また、完全壁の性格は、不安を過度に抱いてしまうために、アスリートに大切な、不安を適度に抱くという特性からは外れるように思われる。

諸言で述べたように、トップアスリートは末子に多い。本研究の結果から、やはり末子はアスリート向き性格特性を数多く持っていることが本研究でわかった。しかし、だからと言って長子や中間子やひとりっ子が、スポーツに向かないというわけではないだろう。たとえば、長子の特徴であるリーダーシップがあり、責任感が強いという特徴は、チームプレーで活かせるだろう。

本研究では、きょうだいの性格特性とアスリート向き性格の関係性についてみてきた。スポーツを行っていくうえで、自分の性格把握は大変重要なことと思われる。そこでさらに、自分のきょうだいの性格特性も理解できれば、競技成績向上の一助になると考えることができるだろう。